奈文研ニュース

No.82 Sep 2021

NABUNKEN NEWS

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE for CULTURAL PROPERTIES

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

日本全国の文化財を地図で閲覧できる「文化財総覧WebGIS」の公開

2021年７月、文化財をインターネット上の地図で検索・閲覧できる「文化財総覧WebGIS」（以下、WebGIS）を公開しました。奈良文化財研究所は、1988年より不動産文化財データの全国センターシステムの一部として遺跡データベースを運用してきました。2003年からは遺跡の抄録データベース、2015年からは発掘調査報告書本文のPDFのデータベースである全国遺跡報告総覧を運用し、それぞれ膨大なデータを蓄積しています。このたび、これらの文化財情報とともに、国交省および文化庁による公開データ、自治体が公開しているオープンデータを一つに統合し、WebGISとして閲覧できるようにしました。データ件数は61万件あります。インターネット上で、簡単に地図から文化財の所在情報を調べ、本文PDFがあれば、刊行物もインターネットで閲覧できるページです。

これらのデータには、文化財の時代や種別（集落遺跡か古墳か等）を付与しているため、目的にあわせて検索することが可能です。例えば、弥生時代の集落遺跡で石包丁がみつかっている遺跡、といった条件で検索できます。

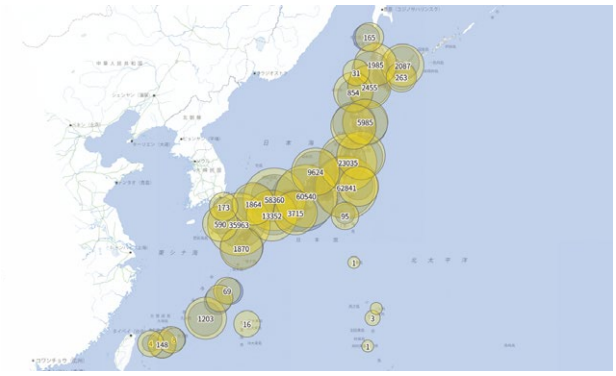
奈文研は、長年にわたって平城宮・京、藤原宮・京および飛鳥地域を発掘調査しています。都城そのものの解明だけでなく、古代律令国家の建設過程の解明に重要な情報をもたらしてきました。その成果は、これまで現地説明会や刊行物で公開してきました。加えて、木簡をはじめとする遺物について、個別のデータベースを公開し、研究者だけでなく広く一般の方々の利用の便をはかってきました。しかし、発掘調査で得られた成果の全体像を把握するには、大部の発掘調査報告書を読み込むしかなく、それを理解することはなかなか難しいのが現状でした。今回、発掘地点や遺構の図面等も登録し、閲覧できるようにしました。

WebGISなので、基盤となる地図が必要です。本システムでは、19種類の地図を重ねて表示させることができます。国土地理院の標準地図・空中写真・活断層図等、産業技術総合研究所の地質図、奈文研の遺構図・地形図、兵庫県のCS立体図（高精度の地形情報）です。

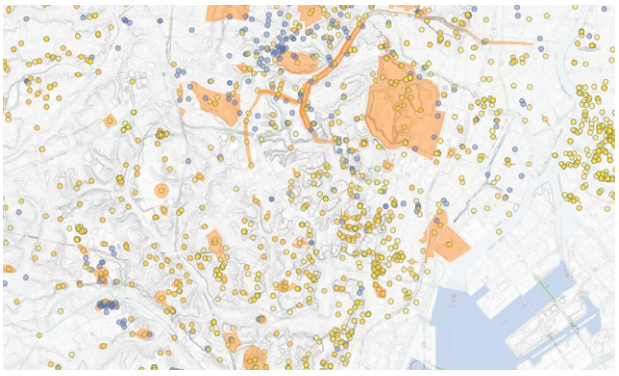
自分の関心のある文化財を条件検索し、目的にあわせて地図を重ねることで、視覚的に結果を確認できます。これまで文章ではわかりづらかった文化財の立地状況を可視化できるようになりました。

利用者の方々にはたいへん好評で、公開初日は１日で15,000のアクセスがありました。一度、「文化財総覧WebGIS」にアクセスいただき、調査成果をぜひご活用ください。　　（企画調整部　高田 祐一）

文化財総覧WebGIS https://heritagemap.nabunken.go.jp/



文化財総覧WebGIS（日本全体）



皇居（東京都）周辺の文化財分布状況

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第208次）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、近年、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなっています。本年度は、大極殿の北方に約1,900㎡の調査区を設定し、2021年４月12日より、発掘調査を実施しています。

まずは今回の調査の経緯を説明します。大極殿院の調査は、戦前の日本古文化研究所の調査にさかのぼり、大極殿院の四周に回廊がめぐること等、基本的な構造が既に知られていました。近年の奈文研の調査によって、大極殿院回廊は桁行14尺、梁行10尺を基本寸法とし、複廊構造を採用していること等、その詳細があきらかになってきています。

従来、大極殿院回廊と大極殿の間は広場（内庭）と考えられてきましたが、2019年度の飛鳥藤原第200次調査において、大極殿の後方を区画する回廊、「大極殿後方東回廊」が発見されました。この回廊は東面回廊から派生し、大極殿院をほぼ２：１で南北に分割します。大極殿院が二つの空間で構成されていたことが、ここで初めてあきらかになりました。

大極殿北方の空間は、前期難波宮等の調査成果に鑑みると、後殿区画としての機能が想定できます。この地点は奈文研が1977年の藤原宮第20次調査で既に調査をおこなっていますが、後世の改変が大きかったこともあり、後殿の発見にはいたっていません。しかし、後殿を想定しうる遺構も確認されており、その可能性が残されてきました。今回の調査区は多くが第20次調査区に重なっています。大極殿北方の空間の存在があきらかとなった今、後殿に関わる遺構が残されていないか、現在の調査水準で再検討することが、今回の調査の大きな目的です。

これまでの調査成果の一部を紹介します。第20次調査区の東・西辺に沿って、今回設けた新規調査区のうち、西側の調査区では、南北に延びる瓦堆積を検出しました。幅約３ｍ程度のこの瓦堆積は、調査区を東西に横切る耕作溝を覆っており、都が平城に遷り、この地が耕地化された後に堆積したものとみられます。

この瓦堆積について調べてみたところ、周辺の条里地割の坪境と一致することがわかりました。条里地割の坪境相当地点に瓦や礫が集中する事例は藤原宮内でも複数確認されています。いずれも瓦は細かく砕かれており、条里の坪境にあたる畦畔を里道として舗装するために敷かれた可能性が考えられます。西側調査区では、明治期以降とみられる溝や池も多数検出されていますが、いずれもこの坪境に沿うように掘られていました。条里地割にもとづく土地単位が、近代まで維持されていたとも考えられます。こうした事例を集めてさらに分析をくわえていくことで、藤原宮廃絶後の土地利用の実態もあきらかとなってくるでしょう。本調査の成果は、近々お伝えできる予定です。みなさまご期待ください。

（都城発掘調査部　道上 祥武）

西側新規調査区（北東から）

条里坪境に堆積する大量の瓦片（北から）

平城宮東院地区の調査（平城第633次）

平城宮の東部には東西約250m、南北約750mの張り出し部があり、この南から南北約350mを東院地区と呼んでいます。東院地区には、皇太子の居所である東宮や、称徳天皇の「東院玉殿」、光仁天皇の「楊梅宮」など、天皇の宮殿がおかれたとみられています。奈文研では、東院地区全体の詳しい構造や性格をあきらかにするため、2004年度から継続的に発掘調査をおこなってきました。2018年度の第595次調査では東院地区北部で大規模な掘立柱建物SB20060の一部を検出しています。今年度はこの掘立柱建物SB20060の全体規模や構造・性格をあきらかにするため、第595次調査の東隣の東院地区中軸付近で調査を実施しました。調査期間は３月29日から７月19日までです。

調査の結果、最大の調査目的である掘立柱建物SB20060の全体規模を確認できました。このほか、掘立柱建物５棟、掘立柱塀５条、溝７条、土坑９基、石組１条、礫敷、足場等を検出しました。

掘立柱建物SB20060は東西約27m、南北約12mの大きさを誇ります。柱穴を南北５列、東西10列の計50基検出しました。柱穴は碁盤の目のように整然と並んでいます。このような柱配置の建物のことを総柱建物といい、高い位置に床を張る建物と想定できます。柱穴の大きさは一辺1.0～1.8mで、四隅が丸い四角形（隅丸方形）をしています。中には深さが約1.4mにもおよぶものもあります。柱穴には柱を抜き取った痕跡（抜取穴）のほか、柱そのものの痕跡が確認できるものもあり、柱と柱の間隔は東西・南北方向ともに約3.0m（10尺）でした。柱穴からは奈良時代後半の土器や天平勝宝年間（749～757）までの軒瓦が出土し、建物を覆う整地土からは神護景雲年間（767～770）に下る軒瓦がみつかっていることから、この建物の存続期間は、孝謙天皇、淳仁天皇、称徳天皇が在位した天平勝宝年間～神護景雲年間（749～770）のいずれかと考えられます。

なお、瓦の出土総量は少ないため、瓦ではなく主に檜皮等の植物性の材を用いて屋根を葺いていたと考えられます。

掘立柱建物SB20060にともなう雨落溝は検出されず、周辺からは礫敷が検出されました。また、この建物と柱筋を揃える付属の建物や掘立柱塀等もみつかっており、計画的に整備された区画の中心建物であることがうかがえます。

では、掘立柱建物SB20060はどのような性格の建物なのでしょうか。今回の調査ではその直接的な手掛かりとなる木簡や墨書土器は出土しませんでした。しかし、床をもち、植物性の材で屋根を葺くのは、住居建築によくみられる特徴です。さらに、非常に大規模な建物であることや、その柱穴の深さからみて高い床を張った建物と考えられること、また東院地区の中軸付近に位置することも特徴的です。これらの点から、掘立柱建物SB20060は天皇や皇太子が住まう宮殿の中心建物である可能性が高いと考えています。

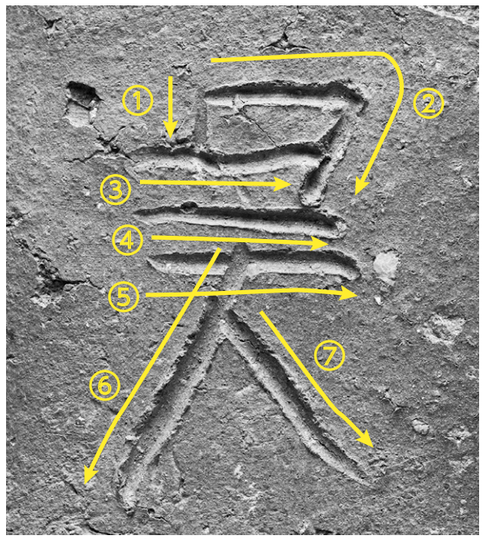
これまで東院地区北部は炊事をおこなう施設（厨（くりや））等の存在が確認されていますが、この建物はそれらより時期が下ります。この時期の宮殿の中心建物の検出を当初は予想していませんでした。今回の発見は東院地区の性格を考える上でも非常に重要です。今後の調査でさらに様相をあきらかにしていきたいと思います。　　（都城発掘調査部　山崎 有生）

掘立柱建物SB20060（北西から　柱位置に人を配置）

深さ約1.4mにもおよぶ柱穴（北から）

檜隈寺跡付近出土「呉」文字瓦（原寸大）

多数確認されている「呉」文字瓦（右側の３点は飛鳥藤原第 164 次調査出土）



本資料の「呉」の筆順

「呉」と書かれた瓦

左ページの瓦は、檜隈寺跡付近で出土した文字瓦です。明日香村在住の方より、2021 年２月に飛鳥資料館にご寄贈いただきました。

丸瓦の凸面、玉縁部に近い箇所に「吳」と刻まれています。瓦が焼かれる前のまだ柔らかい時に書かれたようです。この「吳」という字は「呉」の俗字（異体字）で、木簡等にも多く確認できます。檜隈寺や周辺の発掘調査では、同じ文字の書かれた瓦がこれまでにも多数出土しており、文様や製作技法の特徴から７世紀後半の年代が想定できます。

明日香村大字檜前や大字栗原は『古事記』や『日本書紀』に伝わる「呉原」の地と考えられ、渡来人がこの地に多く住んでいたとされます。また、檜隈寺は渡来系氏族の東漢氏が建てた寺と考えられています。この文字瓦は、檜隈寺と渡来人との関係をものがたる遺物といえるでしょう。

なお、この文字瓦を展示した、令和３年度飛鳥資料館ミニ展示「新収蔵品紹介 ―「呉」と書かれた瓦―」は好評につき、会期を延長しております。ぜひお越しいただき、この瓦を通じて、はるか昔の国際色豊かな飛鳥の地に思いを馳せてみてください。

（飛鳥資料館　清野 陽一）

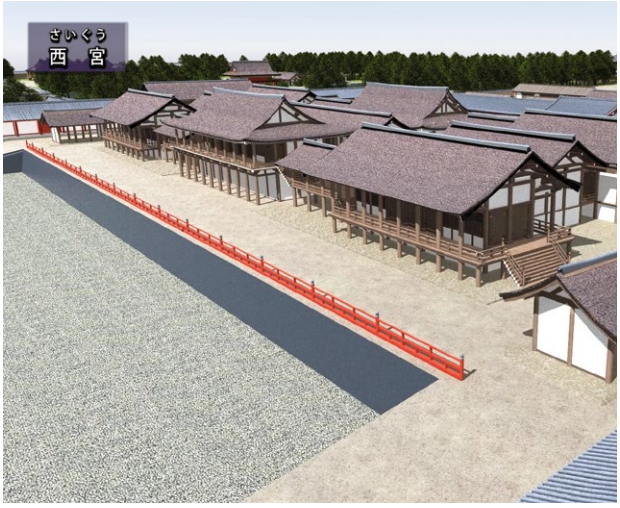
平城宮・京紹介CG動画の作成と多言語化

多くの場合、建物の基礎部分だけが残る遺跡から、往時の姿をイメージするのは容易ではありません。そこで、奈文研では視覚的に奈良時代の平城宮・京を理解できるよう、CGで建物をはじめとする諸施設を復元して、公開することを目指してきました。折しも昨年度、文化庁の補助を受けて英・中・韓の多言語解説を付すことができ、今年３月より動画として公開に漕ぎ着けることができました。

CGモデル原案は、1977年に奈良市が作成した平城京の復元模型を参照しています。ただし、40年以上が経過しているため、都城発掘調査部でプロジェクトチームを組織し、可能な限り最新の研究成果を盛り込むこととしました。作業は発掘遺構から具体的な建物寸法や配置を確定させることから着手しました。とはいえ、平城宮跡において発掘調査を実施できたのはまだ全体の約４割弱。第一次大極殿や朱雀門等、すでに詳細な検討をへて復元された建物はその図面を参考にできます。いっぽう、現時点で復元図がない建物は、発掘遺構を検討して現存する歴史的建造物を参照しながら上部構造を推定しました。

復元には多大な時間と労力を要しましたが、日本語だけでなく多言語での紹介ができたのは幸いです。これらの動画は、平城宮跡資料館で見ることができるほか、なぶんけんチャンネルでも公開しています。この動画で、奈良時代の平城宮・京を体感していただければ嬉しく思います。

（都城発掘調査部　山崎 有生）



西宮の様子（平城宮紹介CG動画より）

キトラ古墳壁画保存管理施設のホームページに「Kitora-Atlas」を公開

奈良文化財研究所が管理運営しているキトラ古墳壁画保存管理施設のホームページに、墳丘や石室、壁画の各図像、各出土品の詳しい解説と写真をご覧いただける「Kitora-Atlas（キトラ－アトラス）」のページを今年３月より公開いたしました。

国宝に指定されているキトラ古墳壁画は保存の観点から、公開する壁画の数と期間を限定せざるをえません。さらに、昨今の新型コロナウィルスの感染拡大による自粛の影響もあり、実物をご覧いただける機会はかなり制約されています。

こうした状況の中でもキトラ古墳について知っていただける機会になればと願い、オンラインによる取り組みをおこなうことになりました。「Kitora-Atlas」は場所や時間を選ばず、誰でもキトラ古墳について知ることができるように、壁画は四神・十二支・天文図の各図像の11項目、出土品は20項目にわたって解説ページを設けています。

実物をみることが難しい時でも、このページで飛鳥時代の工芸技術と大陸からもたらされた思想を身近に感じていただけると思います。

なお、「atlas」は英語で地図帳を意味し、キトラ古墳に描かれた天文図のような、いわゆる星図を「star atlas」と言います。キトラ古墳をもっと知りたい方、または初めて知る方がこのページを「地図」、Atlasとしてご活用いただければ幸いです。

（飛鳥資料館　黒澤 ひかり）

Kitora-Atlas
https://www.nabunken.go.jp/shijin/about/kitora-atlas/

Kitora-Atlas内の壁画解説ページ

研究員の受賞報告

このたび、研究員が賞を授与されましたので、ここで紹介いたします。

企画調整部の加藤真二部長が、旧石器研究の発展に貢献し、優れた業績をあげた会員に授与される2020年度日本旧石器学会学会賞を受賞しました。選考理由は「長年、中国旧石器研究に携わり、常にその成果を発信し続けてきた。『中国北部の旧石器文化』では、膨大な資料・文献調査による網羅的なデータに基づいた中国旧石器時代の時期区分と技術変遷を提示した。また、李占揚山東大学教授との河南省霊井石器群の共同研究では、矢出川技法は華北地方で出現、西南日本に伝播したとする仮説を提唱した。近年では、約20～２万年前の134の石器群を類型分類し、その時空間変遷をまとめた「中国の旧石器―その石器群類型と編年―」を『旧石器研究』15に発表した。これらは、東アジアの旧石器時代を把握する上で重要で、日本旧石器研究の発展に資するところ大」でした。

また、環境考古学研究室の山崎健室長の著書『農耕開始期の動物考古学』（六一書房）が、第11回日本考古学協会の奨励賞を受賞しました。この賞は国内外で刊行された考古学関連分野の著作物が選考対象となっており、奨励賞は考古学の研究分野において今後の活動が期待できる優れた業績に贈られるものです。本書は、縄文時代晩期～弥生時代の動物遺存体を研究し、農耕開始期における動物資源利用の実態をあきらかにしました。二部構成となっており、第Ⅰ部は伊勢湾・三河湾沿岸における事例研究（名古屋大学大学院生命農学研究科へ提出した博士論文）、第Ⅱ部は事例研究の課題をふまえて調査論、方法論、社会貢献について今後の展望を論じています。

（奈文研ニュース編集委員）

受賞された加藤部長と山崎室長

「なぶんけんチャンネル」開設１周年をむかえて

インターネット上の動画共有サイト「YouTube」に「なぶんけんチャンネル」が開設されてから１年が経ちました。記念すべき最初の動画は、2020年７月から８月にかけて平城宮跡資料館で開催した夏期企画展「古代のいのり―疫病退散！」を研究員が紹介するものでした。

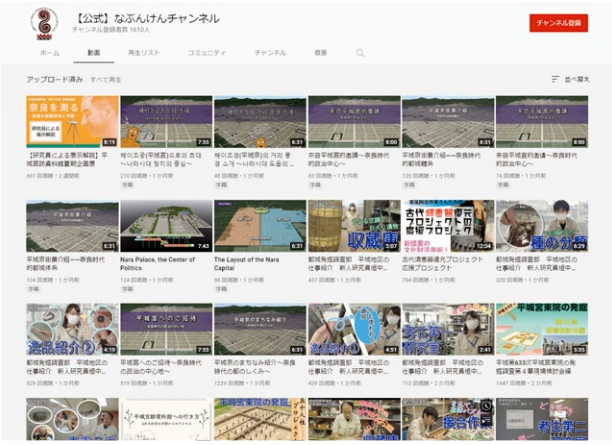
新型コロナウイルス感染症の流行により展示をご覧いただく機会は減少し、ギャラリートークやワークショップも開催を断念しました。このような状況で少しでも展示の魅力に触れていただきたいという思いから、展示企画室主導で取り組みを始めました。

もちろん専用の機材はなく、照明、画角の工夫等の動画撮影の技術ももちあわせておりません。また、効果的な文字の挿入、動画のつなぎあわせ等の編集作業でも苦戦が続きました。なにより、奈文研公式の動画として世界に向けて発信するにあたり、学術面、コンプライアンス面で問題がないかどうかの確認・修正作業に思っている以上に手間と時間を要することもわかりました。

奈文研の調査研究活動の成果をいかにわかりやすくお伝えするか、試行錯誤は続いています。

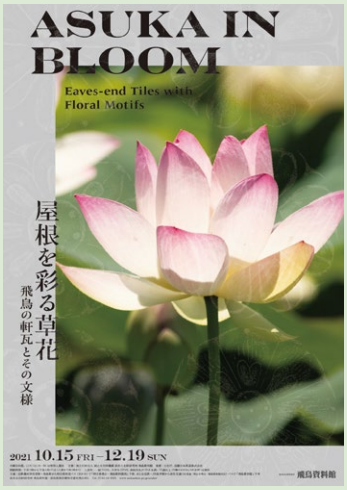
今では、全所的な取り組みとして、展示解説のほかに発掘調査実録、講演記録、研究室の仕事紹介、文化財防災等、奈文研ならではのバラエティに富んだ40本以上の動画を配信しています。動画配信の世界ではまだまだ新参者ですが、これからも楽しみながら動画を増やしていきますのでご期待ください。

それでは、よろしければチャンネル登録お願いします！　（研究支援推進部　田島 章雅）



なぶんけんチャンネル（「YouTube」より）

令和３年度 飛鳥資料館秋期特別展「屋根を彩る草花 ―飛鳥の軒瓦とその文様」



飛鳥は日本で最初に本格的な寺院がつくられた地として有名です。飛鳥には７世紀を通じて数多くの寺院が建立されました。また、その屋根には本格的に瓦が葺かれるようになります。瓦葺きの建物は、造営に高度な技術が必要とされ、そしてなにより、それまでの建物と比べて見た目も大きく変化しました。したがって、この時代には、瓦葺きの屋根をもつ寺院は権威や先進文化の象徴でもありました。その瓦屋根の軒先には導入の初期から様々な草花の文様があしらわれ、特別な世界観をあらわしています。

今回の展覧会では、飛鳥地域で使われた古代の軒瓦文様に焦点を当てます。軒瓦文様のモチーフは東アジアやそのさらに西の地域にルーツがあります。代表的なものにハスの花（蓮華）や唐草の文様がありますが、同じ文様でも、拡散し、普及する過程で様々なバリエーションが生み出されました。日本にもたらされた軒瓦文様の変化と、飛鳥を中心としたその後の展開をご覧ください。　（飛鳥資料館　清野 陽一）

会期：2021年10月15日（金）～12月19日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（月曜が休日の場合は翌平日）
（11月３日（水・祝）は無料入館日）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎ 0744-54-3561

平城宮跡資料館 令和３年度 秋期特別展「地下の正倉院展 ―木簡を科学するⅡ―」

平城宮跡資料館では、毎年、秋期特別展として「地下の正倉院展」を開催し、平城宮・京跡出土木簡の実物展示をおこなっています。本年は「木簡を科学するⅡ」と題し、木簡のモノ（木製品・木質遺物）としての性質に着目した分析・調査や、自然科学分野の手法を応用した木簡研究の成果等をご紹介します。

2014年の「地下の正倉院展」では、木簡の樹種や保存処理の方法、木製品としての特質等に焦点を当てた展示をおこないました（「木簡を科学する」）。本年の展示は、その続編に位置づけられます。文字資料としての側面に注目が集まりがちな木簡に対して、通常とは少し異なる切り口から光を当てる展示となっています。また、最新の調査・研究の成果から、将来の、さらには未来の木簡研究のあり方にも想いを馳せていただけますと幸いです。　（都城発掘調査部　山本 祥隆/企画調整部　藤田 友香里）

会期：2021年10月９日（土）～11月７日（日）
　１期：10/９（土）～10/24（日）２期：10/26（火）～11/７（日）※展示替え　10/25（月）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

■　記　録

文化財担当者研修

○近現代建築保存活用課程
　７月５日（月）～７月９日（金）　10名
○木質文化財の科学的調査課程
　７月13日（火）～７月16日（金）　４名

平城宮跡資料館 令和３年度春期特別企画展

４月29日（木）～６月27日（日）　978名
※「新型コロナウイルス感染症奈良県緊急対処措置」にもとづき、下記の期間を臨時休館いたしました。
５月２日（日）～６月20日（日）
第１部「平城宮跡保存運動のさきがけ―大極殿標木建設式一二〇周年―」
第２部「大地鳴動―大地の知らせる危機と私たちの生活―」

飛鳥資料館　第12回写真コンテスト

７月16 日（金）～９月12日（日）　2,112名
「飛鳥の木」

平城宮跡資料館　令和３年度　夏期企画展

８月７日（土）～９月12日（日）　2,424名
「奈良を測る―森蘊の庭園研究と作庭―」

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　koho_nabunken@nich.go.jp
発行年月　2021年９月